大東文化大学　博士学位論文審査報告書

氏　　名	神野 智久
学　　位	博士（中国言語文化学）
学 位 記 番 号	甲第１４５号
学位授与年月日	平成 29 年 3 月 22 日
審 査 研 究 科	外国語学研究科
論 文 題 目	現代中国語における内外への変化事象に見られる 非対称性の認知言語学的研究―「移動」・「存在」事象を併せて
論 文 審 査 委 員	（主査）大東文化大学教授　髙橋弥守彦 （副査）大東文化大学教授　丁　鋒 （副査）大東文化大学教授　山内智恵美 （副査）東洋大学教授　　続　三義

博士論文　審査報告

この部分に掲載されている内容については、論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨に関する箇所では無い為、加工がされておりますので、ご了承願います。

2. 研究方法、論文の構成と内容

本論文は、連語論を基礎にして認知言語学の理論から、中国語の移動表現“进/出”に関する国内外の先行研究を分析し、収集した“进/出”を用いる文を綿密に調査し、認知言語学でよく用いる図と執筆者本人の収集した例文とによって、先行研究ではこれまで未解決であった連語レベルと文レベルにおける中国語の移動表現“进/出”の非対称性を明らかにし、その理由も明らかにしている。

本論の構成は次の通り（部、章、節を示し、小節は省略）である。

★目次

第Ⅰ部　序論

第1章　序章

1.　はじめに

1.1　研究目標

1.2　研究意義

1.3　研究方法

1.4　研究対象

1.5　本研究の構成

1.6　おわりに

第2章　理論的背景

2.　はじめに

2.1　解釈

2.2　抽象化

2.3　おわりに

第Ⅱ部：分析①

第3章　移動事象について

3、　はじめに

3.1　中国語における移動表現

3.2　移動事象の認知的側面—ベース・プロファイルから—

3.3　おわりに

第4章　存在事象について

4、　はじめに

4.1　存現文の基本事項—先行研究から—

4.2　存現文の定義①—参照点構造から—

4.3　存現文の定義②と体系付け—ベース・プロファイルから—

4.4　おわりに

第Ⅲ部：分析②

第5章　“进”フレーズ再考

5.　はじめに

5.1　“进”の統語的特徴について

5.2　刘月华主编（1998）検討

5.3　動詞分類再検討—包入から—

5.4　“进”の拡張義再検討—身体性と容器から—

5.5　おわりに
第6章　“出”フレーズ再考
6. はじめに
6.1　“出”　の統語的特徴について
6.2　刘月华主编（1998）における分析と問題点
6.3　動詞分類再検討—包入から—
6.4　“出”　の拡張義再検討—身体性と容器から—
6.5　おわりに
第7章　“进”と“出”の非対称性について
7. はじめに
7.1　言語事実—“进”と“出”の非対称性—
7.2　分析—連続性—
7.3　おわりに
第Ⅳ部：終論
終章：全体のまとめと今後の展望
8.1　第Ⅰ部のまとめ
8.2　第Ⅱ部のまとめ
8.3　第Ⅲ部のまとめ
8.4　全体のまとめと今後の展望
参考文献
日本語
中国語
英語
言語資料
謝辞

本論文は全Ⅳ部8章から構成されている。第Ⅰ部は序論であり、第1章序論は研究目標、研究意義、研究方法、研究対象について述べ、第2章では理論的背景について述べている。

第Ⅱ部分析①、第Ⅲ部分析②は本論である。第Ⅱ部分析①第3章では移動事象を述べ、中国語の移動表現、移動事象の認知的側面に言及し、第4章では存在事象を述べ、存現文の基本事項、存現文の定義を検討している。第Ⅲ部分析②では、第5章で連語「“进”フレーズ」を検討し、“进”の統語的特徴、刘月华主编“进”の検討、動詞分類の検討、“进”の拡張義検討を行い、第6章では連語「“出”フ

レーズ」を検討し、“出”の統語的特徴、刘月华主编“出”の検討、動詞分類の検討、“出”の拡張義検討を行っている。第7章では「“进／出”フレーズで作る非対称性」を検討し、さらに文レベルにおける言語事実から“进”と“出”の非対称性を明らかにし、“进”と“出”の連続性から両者の非対称性を認知言語学の観点により理論的に明らかにしている。

第Ⅳ部は終論であり、主要な結論、研究成果と今後の課題についてまとめている。

3. 研究成果および評価

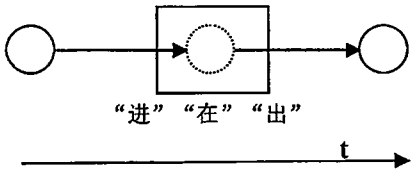
本論文は、連語論を基礎とする認知言語学の成果を中国語に活用して、“进／出”を用いる文の言語事実を理論的に説明している。おもな研究成果は以下の5点にある。

(1) 認知言語学の観点から移動・存在に見る非対称性：移動義と存在義の用法から「“进/出”フレーズ」で作る文の非対称性を明らかにしている。

(2) 存現文の体系的整理：現代中国語の静態存在文、動態存在文、出現文、消失文などの「LP+VP+NP」で記号化される存現文を認知言語学（ベース・プロファイル）の枠組みから体系化している。

(3) “进”と“出”の自主移動と使役移動：“进/出”はいずれも自主移動義である。“进/出＋客体”が使役移動義を表す場合は“进/出”の前に使役動詞（*他把那本书进包里了。⟶ 他把那本书放进包里了。／彼はその本をバッグに入れた。）を前置させる必要がある。

(4) 連続性：“进”と“出”の意味に関する先行研究では、多くの研究成果があるが、“进”と“出”の非対称性については説明されていない。非対称性（“他走进教室/教室里来。”／彼は教室に歩いて入ってきた。；“他跑出教室/*教室里来。”／彼は教室を走って出てきた。“他从教室/教室里跑出来。”／彼は教室から走って出てきた。）を説明するために、下記の図に見られる容器の特徴から移動と存現との関係を新たに連続性（continuity）という観点から捉え、「連続性」による経験の繰り返しが、“进”と“出”の非対称性として表現される、と結論している。



図：「“进”で表す移動」と「“出”で表す移動」の連続性、および“在”の存現性

(5) 本研究成果は、本研究に関する今後の研究と学習に大きく貢献しうる。

4. 結論

以上の審査内容、評価に基づき、本論文を審査対象とする学位論文審査委員会は、全員一致をもって、本論文は博士（中国言語文化学）の学位を授与するに値するものと判断し、ここに報告する。

以　上